

ルソーの「積極教育」に関する一考察

—性の教育と感情・情念の教育を中心に—

教育学科教授 山崎高哉

私は前稿(佛教大学教育学部学会紀要第3号)においてルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)の「消極教育」(Éducation négative)の概念について考察を試みたのであるが、本稿では、彼がそれと対照させた「積極教育」(Éducation positive)について論じようと思う。彼によれば、積極教育とは「しかるべき年齢に達する以前に精神を形成し、人間の義務に関する認識を子どもに与えようとする教育⁽¹⁾」のことであり、青年期以前では年齢不相応の、早期の知育・訓育を意味していたが、しかし、青年期以降においては、普通の意味での教育である「積極教育」が始まり、興味深い教育のテーマが次々に展開されることになるのである。ここでは、紙幅の関係もあり、それらの根幹を成す「性(sexe)の教育」と「感情(sentiments)・情念(passions)の教育」に限って考察することにしたい。

第1節 性の教育

ルソーは『エミール』(Émile ou De l'éducation, 1762)第4巻の冒頭部分において、有名な次の言葉を書き記している。「わたしたちは、いわば、2回この世に生まれる。1回目は存在する(exister)のために、2回目は生きる(vivre)のために。はじめは人間(l'espèce)に生まれ、つぎには男性か女性(Isexe)に生まれる⁽²⁾」、と。「第一の誕生」が人間という「種」への誕生

にほかならないとすれば、「第二の誕生(la seconde naissance)」は男性か女性か、「性」への誕生を意味している。このような「第二の誕生」とともに、人間は今までとは違った「ほんとうの人生に生まれてきて、人間的なものもかれにとって無縁なものではなくなる⁽³⁾」。彼は「性」を介して他者との関係において生き始めるのである。「暴風雨に先だってはやくから海が荒れさわぐように、この危険な変化(révolution)は、あらわれはじめた情念のつぶやきによって予告される。にぶい音をたてて醜態しているものが危険の近づきつつあることを警告する。気分の変化、たびたびの興奮、たえまない精神の動揺(agitation d'esprit)が子どもをほとんど手におえなくする。まえには素直に従っていた人の声も子どもには聞こえなくなる。…燃えはじめた情熱(feux)が目には生気をあたえ、いきいきとしてきたそのまなざしにはまだ清らかな純真さ(innocence)が感じられるが、そこにはもう昔のようにほんやりしたところがない。…理由もないのに落ち着かない気持ちになる。…子どもの激しさがとうてい押さえることができなくなり、興奮が熱狂に変わり、瞬間的にいらだったり、感動したりしたら、わけもわからずに涙を流すようになったら、…女性の手がかれの手にふれると身をふるわせるようになったら、女性のかたわらにいととりみだしたり、臆病になったりしたら、そのときは、オデュッセウス(Ulysse)よ、おお、賢明なおデュッ

セウスよ、気をつけなければならない⁽⁴⁾。さらに青年期に達した彼の「ありあまる生命 (l'œil sanime) は外へ広がろうとする。目がいきいきしてきて、ほかの存在をながめ、わたしたちのまわりにいる人々に興味 (intérêt) をもちはじめ、人間はひとりで生きるようにはつられていないと感じはじめる。こうして人間的な愛情 (affections humaines) にたいして心がひらかれ、愛着 (attachement) をもつことができるようになる⁽⁵⁾」のである。

このような精神の変化をもたらず性本能の目覚め、「伴侶 (compagne) を必要とする⁽⁶⁾」性の情念が「自然の教え (les instructions de la nature)⁽⁷⁾」、「自然の正しい歩み (la véritable marche de la nature)」に従って「段階的に (graduée)⁽⁸⁾」ゆっくりと現れてくる。一方、「人間の教え (les instructions des hommes) はほとんどいつも時期に先だってあたえられる⁽⁹⁾」。しかしながら、もし青年が段階的に徐々に行われる自然の歩みに先立ち、「自然の仕事 (l'ouvrage de la Nature)」の「完成⁽¹⁰⁾」を待たずに、好奇心 (curiosité) を刺激され、官能 (sens) に激しい火を注がれることになるとしたら、「まず個人を、やがては人間ぜんたいを弱く無気力 (énerver) にせずにはおかない」とルソーは警告する。子どもを早熟にするのは、個人の素質や気候風土によっても違うが、それよりも文化の程度、つまり「無知で野蛮な国民 (les peuples ignorans et barbares)」の間よりも「教養のあるひらけた国民 (les peuples instruits et policés)」の間においてであり、後者では農村 (campagne) よりも都会 (ville) においてである。「子どもは特有の明敏さ (sagacité) をもって、礼節のあらゆる猿まねのかげに隠された悪い風習を見破ってしまう。人が子どもにつかわせる洗練されたことば、かれらにあたえる品をよくするようにとの教訓、かれらの目のまえに張りめぐらそうとする神秘

の幕、これらはすべて好奇心を刺激するものとなるにすぎない⁽¹¹⁾。

隠し立てすること自体が子どもの性に対する好奇心を掻き立て、その好奇心が想像力 (imagination) に火を点じ、「想像力にふれる最初の火花 (la première étincelle qui touche à l'imagination)」が官能、つまり性の感覚器官の燃え上がり「確実にはやめる (accélérer)⁽¹²⁾」ことになるのである。

子どもの性に対する好奇心に対して大人や親はどう対処すべきか——ルソーは、ここでこの難問に挑戦している。彼によれば、「子どもの好奇心のまよになっていることについてはやくからかれらに説明してやったほうがいいか、それとも、お上品なうそでかれらをだましておいたほうがいいか⁽¹³⁾」と言え、それは「悪しき二者択一⁽¹⁴⁾」であり、「どちらもしてはならない」。なぜならば、第一に、そういう好奇心は「きっかけをあたえなければ子どもに起こってこない」。次に、「解答をあたえる必要のない問題は、それについて質問する者をだますことを必要としない。うそをついて答えるより、黙らせたほうがいい⁽¹⁵⁾」からである。要は、不用意に子どもの性への好奇心を目覚めさせないようにすることである。

しかし、「子どものまわりにいるすべての人が純真なものを尊重し、愛すること⁽¹⁶⁾」ができればともかく、現実には、子どもの好奇心を掻き立てる悪しき実例、手本に事欠かない。それゆえに、ルソーは「いつも隠しておくわけにはいかないことは、はやくから教えてやるがいい (qu'ils apprennent de bonne heure ce qu'il est impossible de leur cacher toujours)⁽¹⁷⁾」と言う。なぜなら、「子どもの好奇心は、刺激する (exciter) よりも満足させ (satisfaire) てやったほうが、はるかに危険が少ない」からである。そこで、危険が伴わないうちに好奇心を満たしてやるために、子どもの質問に答える

のであるが、その際肝心なことは、「答えはいつもまじめに、かんたんに、きっぱりとあたえなければならない (que vos réponses soient toujours graves, courtes, décidées)⁽¹⁸⁾」ということである。「ちょっとしたうす笑い、目くばせ、不用意な身ぶり (un sourire, un clin d'œil, un geste échapé)⁽¹⁹⁾」、繊細な、あるいは回りくどい言い回しや言葉⁽²⁰⁾は避けるべきである。「粗野なことばづかい (les termes grossiers) をしても、それはたいしたことではない。みだらな観念 (les idées lascives)こそ遠ざけなければならない⁽²¹⁾」。

ルソーが推す「危険な好奇心から子どもを遠ざける正しい話しかた⁽²²⁾」とはこうである。「お母さん (Maman)」と子どもは不意に問いかける。「どうして子どもはできるの (Comment se font les enfant?)」、と。「坊や (Mon fils)」と母親はためらうこともなく答えた。「女の人はおしっこをするようにして子どもを生むんですよ。それはとても痛くてね、そのために死ぬこともあるんですよ」。ルソーがこの母親の答えを「これ以上に分別のある、目的にかなった」ものがないとする所以は「まず、子どもが知っている自然の必要 (un besoin naturel) という観念が神秘的なものとみ (une opération mystérieuse) という観念を遠ざける。それとともに苦痛と死の観念が悲しみのヴェールを投げかけて想像力を弱め、好奇心をおさえる。すべてが出産の結果に心をむけさせ、その原因を考えさせない⁽²³⁾」からである。

ここでルソーが強調しているように、子どもを取り巻く環境や「世間のいまわしい風俗 (la scandale des mœurs du siècle)⁽²⁴⁾」、話し方・身振り・態度・品行を含めての子どもの育て方、教育の結果が子どもの性への好奇心や想像力を目覚めさせ、官能を早くから働かせることになるのであるから、用心深い子どもの育て方、教育によってその目覚めの時期を「はやめたりお

くらせたり」することができる。性への目覚めを速めることは、これまで見てきたように、「自然の仕事はいそがせる⁽²⁵⁾」ことになり、子どもの気力や体質を損ない、それのみならず「精神のはたらきもまたやがて…変質を感じさせることになる⁽²⁶⁾」。さらに、ルソーは、次のように付け加えている。「はやくから墮落して、女と放蕩に身をもちくずしている青年は不人情で残酷である事実をわたしはたえず見てきた。激しい気質がかれらを忍耐力に乏しく、復讐心の強い、狂暴な人間にする。かれらの想像力は、ただ一つのことにとらえられていて、ほかのことはいっさい考えようとしない。かれらは思いやり (pitié) もあわれみ (miséricorde) も知らない。とるにたりない快樂 (plaisir) のためにさえ、かれらは父親も母親も、宇宙ぜんたいも犠牲にしてしまうにちがいない⁽²⁷⁾」、と。しかも、このような個の墮落は、やがて人間全体を「無気力に⁽²⁸⁾」し、人間という種そのものを「退化⁽²⁹⁾」させずにはおかないであろう。

それゆえに、ルソーは、性の教育に次のような原則を定立する。「あらわれはじめた情念に秩序 (ordre) と規則 (règle) をあたえようとするなら、それが発達していく期間をひきのばして、あらわれてくるにつれて整理されていく余裕をあたえるがいい。こうすれば、それに秩序をあたえるのは人間ではなく、自然そのものであることになる。あなたがたの考えることは自然に自分の仕事を整理させることだけだ⁽³⁰⁾」。ここにおいて、ルソーの積極教育のなかでも、「自然の方針に従っていくがいい (Suivez l'esprit de la nature qui)⁽³¹⁾」という従来と同じ主題が奏でられているのが見て取れる。言うまでもなく、ルソーにおいて、消極教育と積極教育は決して対立関係にあるのではなく、むしろ相互補完的な関係に立っているのである。

ここで言われるルソーの性教育の原則を具体

化するとすれば、それは、上述した通り、子どもの好奇心を刺激することなく満足させ、想像力を平静な状態に保ち、「長いあいだ子どもの純真さ（innocence＝純潔）をもちつづけさせる⁽³²⁾」ということになるであろう。子どもの周りにいるすべての人が「純朴な風俗（la simplicité de leurs mœurs）⁽³³⁾」を保ち、純真さ・純潔を尊重し、愛することによって、子どもを性に対する「無知」のなかでできるだけ長くとどまらせることが求められるのである。この無知は「自然にもとづく無知（l'ignorance de la nature）⁽³⁴⁾」であり、子どもの純真さ・純潔の期間を引き伸ばすことによって幸せな結果をもたらす「幸福な無知（heureuse ignorance）⁽³⁵⁾」である。たしかに、都会や「教養のあるひらけた国民⁽³⁶⁾」の間では、否、今日のような刺激に溢れた情報化社会においては、多大の困難を伴うことは火を見るよりも明らかであるが、このようにして育てられた子どもは「自分の性をぜんぜん意識していないし、人間仲間の一人であることを意識していない。男も女も同じようにかれにとっては無縁の存在なのだ。かれらがしていることも言っていることも、なにひとつ自分に結びつけて考えない。それを見もしなければ聞きもしない、あるいはそれにぜんぜん注意をはらわない⁽³⁷⁾」のである。性を好奇心の対象にさせないで、「禁欲（la continence）⁽³⁸⁾」を守り、純真さ・純潔の期間を引き伸ばせば伸ばすほど、つまり自然の「歩みをおくらせるように努力すればするほど青年はいっそうのたくましさと力を獲得することにもなる⁽³⁹⁾」。そればかりではない。ルソーはこうも言っている。「生まれつき悪い子どもでなければ、20歳になるまで童貞（virginité）を失わなかった子どもは、そのときももっとも寛大で、善良で、だれよりも人を愛し、人に愛される人間になっているのだ⁽⁴⁰⁾」、と。これによって、ルソーにおける性の教育は取りも直さず人間教

育にほかならないことが分かるであろう。こうして育てられた20歳のエミールの姿を彼は次のように描いている。「愛する者は愛されたいと思う（Quand on aime, on veut être aimé）。エミールは人々を愛している。だからかれは人々の気に入られたいと思っている。女性たちにはなおさら気に入られたいと思っている。かれの年齢、かれの品行、かれの意図（son âge, ses mœurs, son projet）、すべてが一致してかれのそういう願いを育てようとしている。わたしは、かれの品行、と言った。それは大いに関係のあることなのだ。品行の正しい人こそほんとうに女性を尊敬している人（adorateurs des femmes）なのだ。他の人々のように、女性にちやほやする社会の、人をばかにした、なにかわけのわからぬことばづかいは知らないが、そういう人には、もっと真実のこもった（vrai）、もっとやさしい（tendre）、そして心からのいんぎんさ（part du cœur）がある。…めざめたばかりの肉体をもちながらも、それに抵抗する豊かな理性をそなえている（avec un temperament tout neuf et tant de raisons d'y résister）。エミールはどんなふうに見えることだろう…⁽⁴¹⁾」。

《註》

- (1) ルソー著、西川長夫訳「ジュネーヴ市民ジャン＝ジャック・ルソーからパリ大司教クリストフ・ド・ボーモンへの手紙」、『ルソー全集』第7巻、白水社、1982年、462頁。
- (2) ルソー著、今野一雄訳『エミール』（中）、岩波文庫、1962年、5頁。
- (3) 同上、7頁。
- (4) 同上、6－7頁。
- (5) 同上、24頁。
- (6) 同上、12頁。
- (7) 同上、14頁。
- (8) 同上、24頁。
- (9) 同上、14頁。
- (10) 同上、51頁。

- (11) 同上、14-15頁。
- (12) 同上、18頁。
- (13) 同上、16頁。
- (14) 太田祐周著『ルソーにおける人間の誕生』、錦正社、1968年、364頁。
- (15) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、16頁。
ルソーは別の箇所で、「子どもはどうしてできるの?」というごく自然に子どもが発する、しかし、厄介な質問に対して、「息子をだますようなことはしないでそれをきりぬけるために母親が思いつくいちばんかんたんなやりかたは、かれを黙らせることだ」(同上、19頁)と述べている。
- (16) 同上、18頁。
- (17) 同上、17頁。ルソーは具体的に「16歳になるまで性のちがいということについてなにも知らせないでにおける自信がなければ、10歳になるまでにそれを教えてやるようにするがいい」(同上、17頁)と言っている。
- (18) 同上、16頁。
- (19) 同上、18頁。
- (20) 例えば、「子どもはどうしてできるの?」という質問に対して「それは結婚した人の秘密です」と答えることは、子どもを「結婚した人の秘密を知るまではひとときも落ち着」(同上、19頁)かせないであろうし、また彼は遠からずその秘密を知ることになるであろうとルソーは指摘している。
- (21) 同上、17頁。
- (22) 同上、19頁。
- (23) 同上、20頁。
- (24) 同上、266頁。
- (25) 同上、15頁。
- (26) 同上、51頁。
- (27) 同上、25頁。
- (28) 同上、14頁。
- (29) 同上、15頁&266頁。
- (30) 同上、22頁。
- (31) 同上、18頁。
- (32) 同上、15頁。ルソーは別の箇所でも、純真さ・純潔を保つことの意義をこう強調している。青年に「健康、力、勇気、美徳、愛そのもの、そして人間のほんとうの宝はすべて、純潔への好みにかかっていることをはっきりと教えてやる。こういうふうにするなら、その純潔を願わしいもの、貴重なものとかれに考えさせ、それをたもつために示される方法にかれの精神を従順にすることにすると、わたしは言おう」(同上、242頁)。
- (33) 同上、311頁。
- (34) 同上、22頁。
- (35) 同上、15頁。
- (36) 同上、14頁。
- (37) 同上、21頁。
- (38) ルソーは禁欲について次のように言っている。「20歳になるまでは体は成長し、あらゆる物質を必要とする。そのころは、禁欲は自然の秩序になかったことで、それをまもらなければ、たいていのばあい、体質をそこなうことになる。20歳をすぎてからは、禁欲は道徳的な義務になる。それは自分自身を支配することを学び、いつでも自分の欲望を押さえることができるようになるために必要なことだ」(同上、264頁)、と。
- (39) 同上、16頁。
- (40) 同上、26-27頁。ルソーはさらに、子どもに「少なくとも20歳まで、欲望について無知な状態と官能の純粹さ (l'ignorance des desirs et la pureté des sens) をもちつづけさせることができる…考えている」(同上、227頁)と言明している。
- (41) 同上、271-272頁。

第2節 感情・情念の教育

ルソーは『エミール』第3編の終わり近くで、エミールに対するこれまでの教育を振り返りつつ、今後の教育の課題について、こう述べている。「まずかれの体 (corps) と感官 (sens) を訓練したあとで、わたしたちはかれの精神と判断力 (jugement) を訓練した。そしてかれの手足 (membres) をもちいることをかれの能力 (facultés) をもちいることにむすびつけた。かれを行動し思考する存在 (un être agissant et pensant) につくりあげた。人間として完成させる (achever l'homme) には、人を愛する感じやすい存在 (un être aimant et sensible) にすること、つまり感情によって理性を完成させる (perfectionner la raison par le sentiment) ことが残されている⁽¹⁾」、と。ルソー

における青年期の教育の中心的課題とは「人を愛する感じやすい存在にすること、つまり感情によって理性を完成させ」、そして「人間として完成させる」ことにほかならない。

青年期の教育において鍵を握ると考えられる「感情」、あるいは「情念」をルソーはどのようなものとして捉えていたのであろうか。

ルソーによれば、人間にとって「存在する(exister)とは感じる(sentir)」ことにほかならない。「わたしたちの感性(la sensibilité = 感受性)は、疑いもなく、知性(l'intelligence)より先に存在するのであって、わたしたちは観念よりも先に感情をもった」のである。これらの感情のなかには、神が人間の自己保存の手段として与えてくれた「生得的(innés)」で、しかも「わたしたちの本性にふさわしい感情(sentimens convenables à nôrte nature)」がある。それが「自分にたいする愛(l'amour de soi = 自己愛)⁽²⁾」なのである。この「自分にたいする愛 = 自己愛」がルソーにおける「感情」と「情念」との関係を決き明かす鍵概念になる。ルソーは言う。「わたしたちの情念の源(la source de nos passions)、ほかのすべての情念の初めにあって、そのもとになるもの(l'origine et le principe)、人間が生まれるとともに生まれ、生きていられるあいだはけっしてなくなるだけただ一つの情念、それは自分にたいする愛だ。それは原始的な(primitiv)、人が生まれながらもつ情念で、ほかのあらゆる情念に先だち、ほかの情念はすべて、ある意味で、その形を変えたものにすぎない⁽³⁾」、と。この引用文によって、ルソーにおいて「感情 = 情念」と捉えられていたと考えて間違いない。したがって、以下の論述においては、感情・情念と表記することにする。

もう一つ、上の引用文のなかに気にかかる関係が現れている。それは「感性 = 感受性」と感情・情念との関係である。この関係についても、

ルソーが「あらゆる情念の源は感受性⁽⁴⁾」であると言明しているのも、明らかになる。感性・感受性が感情・情念の源なのであり、しかも、それは、既述の「性」の情念の源として生まれてくる⁽⁵⁾のである。ルソーにおける感情と情念、感(受)性ととの関係が明白になったところで、「自分にたいする愛 = 自己愛」からどのような感情・情念が派生してくるかの考察に戻ることにしてしよう。

ルソーは「子どもの最初の感情は自分自身を愛することだ。そして第二の感情は、この最初の感情から生じてくるのだが、かれに近づく人々を愛することだ(Le premier sentiment d'un enfant est de s'aimer lui-même, et le second qui dérive du premier est d'aimer ceux qui l'approchent)⁽⁶⁾」と言う。子どもは無力な状態にあり、他人の助力を必要とするので、彼を助けようとして近づいてくる人に対して好意(la bienveillance)・好感(sentiment favorable)を抱く。こうして、彼には「自分にたいする愛 = 自己愛」とともに自分と「同じような人間(le semblable)」にたいする愛——これはまた「あわれみ(の心)」あるいは「憐憫(の情)(pitié)」とも言い表される——という「人類に関連する別の生得的な感情」が芽生えてくる。ルソーにとって、人間とは「その本性からいって社交的(sociable)である、あるいはとにかく、社交的になるようにつくられている⁽⁷⁾」存在なのである。

それでは、子どもにおいてこれらの感情・情念をどのようににはぐくめば、社会的関係のなかで生まれる「相対的で人工的⁽⁸⁾」な感情であり、「憎しみにみちた、いらだちやすい情念(passions haineuses et irascibles)」である「自尊心」ないし「利己心(amour propre)」を生じさせずに、人間としての完成へと導いていくことができるのであろうか。

ルソーは自分にたいする愛 = 自己愛と自尊心

ないし利己心とを比較してこう言う。「自分にたいする愛（＝自己愛）は、自分のことだけを問題にするから、自分のほんとうの必要が満たされれば満足する。けれども自尊心（＝利己心）は、自分をほかのものにくらべてみるから、満足することはけっしてないし、満足するはずもない。この感情は、自分をほかのだれよりも愛して、ほかの人もまたかれら自身よりもわたしたちを愛してくれることを要求するのだが、これは不可能」である、と。ここから導き出される「人間を本質的に善良にする」感情・情念教育の原則の一つは、「多くの欲望をもたないこと、そして自分をあまり他人にくらべてみないこと（d'avoir peu de besoins et de peu se comparer aux autres）⁽⁹⁾」である。

次に、ルソーは感情・情念を用いるに当たっての「人間の知恵（la sagesse humaine）のすべて」として、二つの原則を挙げている。

① 人間一般としても、個人としても、人間の正しい関連を理解すること（Sentir les vrais rapports de l'homme tant dans l'espèce que dans l'individu）。

② その関連に従ってあらゆる心の動きに秩序を与えること（Ordonner toutes les affections de l'ame selon ces rapports）。

ルソーによれば、人間の感受性は「自分のことだけに限られているあいだは、かれの行動には道徳的（moral）なものはない。感受性が自分の外へひろがっていくようになるとはじめて、かれはまず善悪の感情を、ついでその観念をもつようになり、それによってほんとうの人間（véritablement homme）になり、人類を構成する一員（partie intégrante de son espèce）になる⁽¹⁰⁾」のである。すでに見たように、人間の感情・情念が自分の外へ広がっていくとき、それはまず最初に自己を慰め、助ける近親者に向かい、次いで自分と同じような者、自分自身と同じように悩み、苦しむ存在、つま

り「仲間・同類」へと向かう。ルソーはこう言っている。「注意ぶかく育てられた青年が感じることのできる最初の感情は、愛（l'amour＝恋愛）ではなく、友情（l'amitié）である。あらわれはじめた想像力の最初の行為は青年に自分と同じような人間の存在を教えることであって、人類にたいする感情が異性にたいする感情よりはやくめざめる⁽¹¹⁾」、と。感情・情念の教育は青年に現れ始めた想像力を、そしてまた感受性を生き生きと働かせ、「自分が悩んだことを悩み、自分が感じた苦しみを感じ、自分もまた感じるかもしれないこととしてその観念をもっているほかの苦しみを感じている、自分と同じような存在があること」を知らせることが必要なのである。もし想像力を働かせて自分の「存在を捨ててそのものの存在になる（nôtre être pour prendre le sien）」こと、「自分の外へ自分を移すこと（commence à le transporter hors de lui）⁽¹²⁾」（＝感情移入）がなければ、また感受性を刺激して「人間愛（l'humanité）」、つまり「あわれみ（の心）」または「憐憫（の情）」、あるいは「同情（la commisération＝同情心）、仁慈（la clémence）、寛大（la générosité）⁽¹³⁾」などの最初の種子を植えつけることがなければ、誰も「感じやすく（＝感受性の鋭い）、あわれみぶかい（pitoyable）」人間にはなれないからである。

かくして、ルソーは、感情・情念教育の今一つの原則として「あわれみ（の心）」または「憐憫（の情）」、「親切な心（la bonté）、人間愛、同情心、慈悲ぶかい心（la bienfaisance＝好意）など、おのずから人々を喜ばせることになる、やさしく人をひきつけるあらゆる情念を刺激し、羨望の念（la convoitise）、憎悪心（la haine）など、人にいやがられる残酷な情念、いわば感受性を無意味にするばかりでなく、否定的にして、感じている者の心を苦しめることになるあらゆる情念を呼び起こさないようにすること⁽¹⁴⁾」

を提唱するのである。そして彼はそのための格率 (la maxime) として、以下の三つを立てる。

第一の格率は「人間の心は自分よりも幸福な人の地位に自分をおいて考えることはできない。自分よりもあわれな人の地位に自分をおいて考えることができるだけである (Il n'est pas dans le cœur humain de se mettre à la place des gens qui sont plus heureux que nous, mais seulement de ceux qui sont plus à plaindre.)⁽¹⁵⁾」というものである。悲しいかな、人間にあっては「幸福な人の様子は、ほかの者に愛情よりも羨望の念 (la envie) を感じさせる。そういう人が自分ひとりの幸福を手に入れたのは、もってもない権利を横どりしたからだ」とわたしたちは非難したくなる。…ところが、目のまえで苦しんでいる不幸な人をかわいそうだと思わない者がいるだろうか。…想像はわたしたちを幸福な人の地位において考えさせるよりもむしろみじめな人の地位において考えさせる (L'imagination nous met à la place du misérable plutôt qu'à celle de l'homme heureux)⁽¹⁶⁾」のである。そこで、青年に「おのずから人々を喜ばせることになる、やさしく人をひきつけるあらゆる情念」を感じさせるには「ほかの人たちの輝かしい身分を感嘆させるようなことはしないで、それをみじめな側面から示してやらなければならない⁽¹⁷⁾」。何と云っても「人間を社会的にするのはかれの弱さ (la faiblesse)」であり、「わたしたちの心に人間愛を感じさせるのはわたしたちに共通のみじめさ (misères communes)」であるからである。そして、人間に共通の「弱さ、みじめさ」が「愛情 (la affection) によってわたしたちを結びつける⁽¹⁸⁾」のが、ルソーによれば、「人間の正しい関連」なのである。

第二の格率は「人はただ自分もまぬがられないと考えている他人の不幸だけをあわれむ (On ne plaint jamais dans autrui que les

maux dont on ne se croit pas exempt soi-même)」である。ルソーは自問自答する。「なぜ王たちは臣下にたいして無慈悲なのか。けっしてふつうの人間になるつもりはないからだ。なぜ金持ちは貧乏人にたいしてあんなに苛酷なのか。貧乏人になる心配はないからだ。なぜ貴族は民衆 (le peuple) をあんなに軽蔑するのか。けっして平民になることはないからだ」。ルソーの国王、貴族、資産家等、上流階級への批判は苛烈である。たしかに、我々人間は、古代ローマの詩人ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, 70-19B.C.) の叙事詩「アエネイス (Énéide)」に謡われているように、「不幸を知っていればこそ不幸なかたをお助けしたいと思う (Non ignara mali, miseris succurrere disco)⁽¹⁹⁾」のである。それゆえに、「不幸な人の苦しみ (les peines des infortunés) を、貧しい人の労苦 (les travaux des misérables) を、光栄の高み (haut de sa gloire) から見おろしているといったようなことにあなたがたの生徒を慣れさせてはいけない。そして、かれがそういう人たちを自分には縁のない存在と考えているとしたら、かれらをあわれむことを教えることができると思っはいけない。その不幸な人たちの運命はかれの運命になるかもしれないこと、かれらの不幸のすべては彼の足もとに横たわっていること、無数の思いがけない不可避の出来事が一瞬ののちにかれをそこへ落としこむかもしれないこと、そういうことを十分に理解させるがいい。家柄 (la naissance) も健康 (la santé) も富 (les richesses) もあてにしないように教えるがいい。運命のあらゆる移り変わりを示してやるがいい⁽²⁰⁾」。要するに、生徒に「自分もその不幸を免れているわけではないという同一性の意識⁽²¹⁾」をもたせ、「人間にふりかかる災厄を目で見て、じかに感じさせ…、あらゆる人間がたえずとりまかれている危険によってかれの想像を揺りうごかし、

…かれを人間的 (humain) にしてやる」ことが大切なのである。

第三の格率にはこう言われている。「他人の不幸にたいして感じる同情は、その不幸の大小ではなく、その不幸に悩んでいる人が感じていると思われる感情に左右される (La pitié qu'on a du mal d'autrui ne se mesure pas sur la quantité de ce mal, mais sur le sentiment qu'on prête à ceux qui le souffrent)⁽²²⁾」、と。人間が動物よりも人間に対してより多く同情を感じ、人間にあっては、その人に払っている「尊敬 (le cas) の程度」によって同情の度合いが異なり、「軽蔑している人間の幸福を軽く考える」のはそのゆえである。しかしながら、ここでも、ルソーの鋭い社会批判が炸裂する。「政治家があんなに軽蔑した調子で民衆について語るとしても、多くの哲学者が人間をごくたちの悪い者にしようとしているとしても、もう驚くにはあたるまい。人類を構成しているのは民衆だ (C'est peuple qui compose le genre humain)。民衆でないものはごくわずかなものなのだから、そういうものを考慮に入れる必要はない。人間はどんな身分にあらうと同じ人間なのだ (L'homme est le même dans tous les états)。そうだとしたら、いちばん人数の多い身分こそいちばん尊敬にあたいするのだ⁽²³⁾」。この人間尊重、民衆重視の思想に基づいて、ルソーは言う。「あなたがたの生徒に、あらゆる人間を愛すること、人間をいやしめる連中さえ愛することを教えるがいい。自分をどんな階級にもおくことなく、あらゆる階級に自分をみださせるようにするがいい。かれをまえにおいて、感動 (l'attendrissement) をこめて、さらに、あわれみをこめて、人類について語るがいい。しかし、けっして軽蔑 (le mépris) をこめて語ってはならない。人間よ、人間を辱めてはいけぬ (Homme, ne déshonore point l'homme)⁽²⁴⁾」、と。

このようにして、青年に現れ始めた想像力と感受性を活用・刺激して、官能に溺れ、快楽に目が眩んで「思いやりもあわれみも知らない」青年にならないように、人間愛の感情をはぐくまなければならないわけであるが、しかし、この点に関し、ルソーはそれほど楽観的ではない。青年をそのような方向に導いていきさえすれば、「かれはいきなりあらゆる人間を抱擁するなどと思っただけではない。人類ということばがかれにとってなんらかのものを意味することになると考えてもいけない」。それというのも、青年の天性をもっといろいろな方法で育てていったあとでなければ、すなわち青年「自身の感情と他人のうちに観察される感情について多くの反省 (la réflexion) をしたのちにはじめて、かれはその個人的な観念 (notions individuelles) を人類という抽象的な観念 (l'idée abstraite d'humanité) に一般化 (généraliser) するにいたり、かれをその同類に同化する (identifier) ことができる愛情を個人的な愛情に結びつけることができるようになる⁽²⁵⁾」からなのである。

それでは、青年の天性を育てるための別の方法とは何であろうか。ルソーは言う。「そのためには、…いままでわたしたちがたどってきた道とは反対の道 (route opposée) をとって、自分の経験によってではなく、むしろ他人の経験 (l'expérience d'autrui) によって青年を教育する必要がある⁽²⁶⁾」、と。そして、他人の経験から学び、多くの反省を経て、「健全な判断力 (jugement intègre) と健康な心 (cœur sain)⁽²⁷⁾」を青年にもち続けさせるための方法として、ルソーは歴史 (l'histoire) と個人の伝記 (vie particulières) を取り上げる。

では、なぜ歴史と伝記なのか。まず、歴史は人間の心を理解させるために、「遠いところにいる人間 (les hommes au loin)」、換言すれば、「別の時代 (d'autres tems)」あるいは「ほかの場所 (d'autres lieux) にいる人間⁽²⁸⁾」を見

せることができ、それを通して生徒に「人間は生まれつき善良 (naturellement bon) であることを知らせ、それを感じさせ、自分自身によって隣人を判断させ (juger de son prochain par lui-même)」る一方、「どんなふうにかれらが人間を墮落させ、悪くさせるかを見させ、人々の偏見 (le préjugé) のうちにかれらのあらゆる不徳の源 (la source de tous leurs vices) をみいださせ、個人一人一人には尊敬をはらわせるが、群衆を軽蔑させ、人間はみんなほぼ同じような仮面 (le masque) をつけていること、しかしまた、なかには顔を覆っている仮面よりもずっと美しい顔があることを知らせ⁽²⁹⁾」る。太田祐周も言う通り、人間の社会における在り方の二面性、つまり人間の自然的善性と社会の不平等性を「総体的にしかも具体的に教えるものとして、歴史が取り上げられる⁽³⁰⁾」のである。もちろん、そればかりではない。歴史が取り上げられるのは、そのなかで人間の行動が明らかにされ、人間が「事実にもとづいて判断される⁽³¹⁾」からでもある。たしかに、歴史は「人間をよい面からよりも、はるかに多く悪い面から描い」たり、「歴史に述べられている事実は、その事実が起こったとおりに正確に描かれたものだとはとても言えない⁽³²⁾」という大きな欠点・不都合をもっている。歴史が歴史家の独断的な判断や評価によって彩られてしまうことが少なくないのである。しかし、トゥキュデイデス (Thukydeides, 460-ca.400B.C.) のように、「判断せずに事実をつたえている (rapporter les faits sans les juger)⁽³³⁾」限り、事実の正確な記述としての歴史教育は「教訓めいた教訓をあたえ、生徒自身の経験と理性の歩みのかわりに先生の経験と権威をかれの心におくという不都合⁽³⁴⁾」を避けることができる。とはいえ、「近代の歴史 (l'histoire moderne)」と「一般史 (l'histoire en général)」はルソーによって除外される。なぜなら、近代の歴史には特徴がな

いし、近代の人間はみな似たり寄ったりであるからであり、一般史は、たしかに、記憶されるべき目立った事実だけを記録しているが、それらの事実の原因・理由がいつも不明のままになっているからである。

総じて、ルソーの見解によれば、「歴史は人間をある選ばれた時期に、はなばなしい服装をしているときにとらえて」おり、「人から見られるためにちゃんと身じまいをした公人 (l'homme public) を見せるだけ」である。したがって、「歴史が描いているのはその人自身ではなく、むしろその人が着ている服なのだ」。そこで、ルソーは人間の心の研究を始めるに当たっては、「個人の伝記」を読むことの方を推奨する。それというのも「たしかに、集合した人々つまり国民の精神 (le génie des hommes assemblés ou des peuples) は個々の人の性格とはひじょうにちがっているし、人間の心を集団においても検討しないのはきわめて不完全にそれを知ることになる。しかし、人々について判断をくだすにはまず人を研究しなければならないということ、そして各人の傾向を完全に知る者は国民ぜんたいのうちに結びあわされたその作用をすべて予想できるということもやはりたしかなことだ⁽³⁵⁾」からである。多くの伝記作家のなかから誰を選ぶか。言うまでもなく、プルタルコス (Plutarchos, ca.46-ca.120) である。なぜならば、彼は「偉大な人々を些細な事実によって描きだすことに追隨を許さない魅力をもって」おり、また「逸話を選びだすことにきわめてたくみで、しばしば一言で、ちょっとした微笑で、身ぶり、十分によく主人公の特徴を示している⁽³⁶⁾」からである。その点、人間の特徴や性格を明らかにする日常的で卑近な、しかし、真実で特徴的な細部の描写が近代の文体からは遠ざけられているので、個人の伝記を読む場合でも、プルタルコスを初めとする古代の作家に頼らざるを得ないとされる。しかし、彼ら

の手になる伝記を読むことで、「偉大な人々は自分がすぐれた者であることについて思いがいはしてはいない。かれらはそれを見、感じながらも、謙虚な態度をとる。多くのものをもっていなければならないほど、かれらはなおさら自分に欠けているすべてのものをよく知っている⁽³⁷⁾」ことを学ぶことができるのである。

こうして、青年に歴史によって人間の社会の在り方を、個人の伝記によって人間の個人的な生き方を学ばせ、彼は「人々を知ろうとする大きな関心 (intérêt)、人々を判断するにあたってできるだけ公平 (impartialité) であること、人間のあらゆる情念を理解できる程度に感じやすく、情念にとらえられずにすむ程度に平静な心 (calme)⁽³⁸⁾」を備えることができた。目的地までもう一步のところまで到達した。そこで、ルソーはこう言う。「わたしたちはやっと道徳的な秩序 (ordre moral) のなかへはいつていく。わたしたちは人間の第二段階を経過したのだ。ここで…心の最初の動きから良心 (conscience) の最初の声が聞こえてくること…、愛と憎しみの感情から善悪の最初の観念 (notion) が生まれてくること…、『正義 (justice)』と『善 (bonté)』はたんに抽象的なことば、悟性 (entendement) によってつくられるたんなる倫理的なものではなく、理性によって照らされた魂がほんとうに感じるものであること、それはわたしたちの原始的な感情の正しい進歩の一段階にほかならないこと、良心とかかわりなしに、理性だけではどんな自然の掟も確立されないこと…をわたしは証明したい⁽³⁹⁾」。ルソーの言う「良心」とは人間に善を好ませ、悪を憎ませる生まれながらの感情であり、「神聖な本能、滅びることなき天上の声、無知無能ではあるが、知性をもつ自由な存在の確実な案内者、善悪の誤りなき判定者 (instinct divin, immortelle et céleste voix, guide assuré d'un être ignorant et borné, mais intelligent et libre; juge infaillible du

bien et du mal)⁽⁴⁰⁾」である。「理性」は規則も原理ももたないので、自然によって人間の「心の底に消し去ることのできない文字でしるされている⁽⁴¹⁾」規則であり、かつ「正義と美徳の生得的な原理 (un principe inné de justice et de vertu)⁽⁴²⁾」である良心とのかかわりなしには、理性だけではどんな自然の掟も確立されないとされる。しかし、逆に、良心も「善悪を知ること teaches…理性なしには発達しえない⁽⁴³⁾」。良心と理性はこれほど緊密な結合関係にあるのであるが、それでは、善を好み、悪を憎む良心に善悪を知らせる理性の働きを活発化させるにはどうすればよいのか。ルソーの答えはこうである。「自尊心を他の存在のうえにひろげよう。わたしたちはそれを美徳に変えることができる (Etendons l'amour-propre sur les autres êtres, nous le transformerons en vertu)」。同情 (pitié = あわれみの心、憐憫の情) が変じて弱みにならないようにするために、…それを一般化 (généraliser) し、全人類 (le genre humain) のうえにひろげなければならない。そうすれば、正義と一致するかぎりにおいてのみ人は同情をもつことになる。あらゆる徳のなかで正義は人々の幸福にいちばん役にたつものだから。「自尊心 (ここでは、比較が働いていないので、自分にたいする愛 = 自己愛の意味)」や「同情 (= あわれみの心、憐憫の情)」を理性によって「一般化」することで、「人類にたいする愛 (l'amour du genre humain) = 「正義にたいする愛 (l'amour de la justice)⁽⁴⁴⁾」に変えることができるというのである。こうして、感情・情念の教育は青年期に働き始める良心と理性の教育と共働することになる。

今一つ、ルソーはこのような知的学習と並行して、「若い人たちにたいする教訓はすべて、ことばよりもむしろ行動で示⁽⁴⁵⁾」すこと、獲得した知識を「行動に移し、…生活に役だつように応用すること⁽⁴⁶⁾」を求める。したがって、

彼は社会的な行動を生徒に実践させようとする。「あなたがたの生徒に、かれにできるあらゆるよい行ないをさせるがいい。貧しい人々の利害はいつもかれの利害になるようにするのだ。財布だけでなく、かれの心づかいによって貧しい人々を助けさせるのだ。かれらのためになることをし、かれらをまもり、自分の体と時間をかれらに捧げさせるのだ。かれを貧しい人々の代理人にならせるのだ。かれは一生のあいだこれ以上に高尚な職務 (noble emploi) をはたすことはあるまい⁽⁴⁷⁾」。

最後に、18歳のエミール青年に対するルソーの誇らしい現状報告を引用して、終わることにしたい。「どれほどひろい見解 (grandes vues) がしだいにかれの頭のなかに整理されていくのをわたしは見るのか。…どれほど明確な判断力、どれほどの確かな理性がかれのうちにつくられていくのをわたしは見るのか。正義のほんとうの原理 (les vrais principes du juste)、美のほんとうの典型 (les vrais modèles du beau)、存在者のあらゆる道徳的な関連 (les rapports moraux des êtres)、秩序のあらゆる観念 (toutes les idées de l'ordre) が、かれの悟性にきざみこまれていく。かれはそれぞれのものの場所と、それをそこからひきはなす原因を見ている。善となりうるもの、それを妨げるものを見ているのだ。人間の情念を感じたことはなくても、かれはその錯覚とそのたわむれを知っている⁽⁴⁸⁾」。

《註》

- (1) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(上)、岩波文庫、1962年、365頁。
- (2) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、171頁。
- (3) 同上、8頁。
- (4) 同上、22頁。
- (5) この点に関して、ルソーは思春期における性の目覚めとの関連で、こう書いている。「燃えはじめた情熱が目には生気をあたえ、いきいきとしてきたそのまなざしにはまだ清らかな清純さが

感じられるが、そこにはもう昔のようにぼんやりしたところがない。目が口以上にものを言うことをかれはもう知っているのだ。かれは目を伏せたり、顔を赤らめたりすることができるようになる。なにを感じているのかまだわからないのに、それに感じやすくなる。理由もないのに落ち着かない気持ちになる」(同上、8頁)、と。

- (6) 同上、10頁。
- (7) 同上、171頁。
- (8) ルソー著、小林善彦訳『人間不平等起原論』、中公文庫、1974年、173頁。
- (9) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、11頁。もっとも、ルソーは比較・競争の完全否定者ではない。彼は別の箇所でこう言っている。「けっしてほかの子どもとくらべないこと、すこしでも論理的にものごを考えるようになったら、かけくらべをするときでも、競争相手のことを考えさせないこと。嫉妬心や虚栄心によってしか学べないことは学ばないほうがよほどましだと思う。わたしはただ、かれがなしとげた進歩を毎年注意してやることにしよう。それをつぎの年になしとげる進歩とくらべることにしよう。わたしはこう言ってやろう。あなたはいろいろな点で成長した。…いまではあなたにはどれほどのことができるか、しらべてみましょう、と。こう言ってわたしは、だれにたいしても嫉妬を感じさせるようなことなしに、かれに刺激をあたえる。かれは自分を追い越そうとするだろう。かれはそうしなければならぬのだ。かれが自分自身の競争者になったところで、なんの不都合もないと思う」(ルソー著、今野一雄訳『エミール』(上)、324頁)、と。
- (10) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、23頁。
- (11) 同上、24頁。
- (12) 同上、30頁。
- (13) 同上、25頁。
- (14) 同上、30-31頁。
- (15) 同上、31頁。
- (16) 同上、26-27頁。
- (17) 同上、32頁。
- (18) 同上、26頁。吉澤昇は、このようなルソーの人間観は「当時の身分制社会やサロンの社交的人間に対する批判をこめているが、自分の誕生と同時に母を失い、やがて父親にも生別し、故郷からも離れ、あまたの苦しみのなかで社会人となった彼自身の体験からもにじみでたものだろう」(吉澤昇・為本六花治・堀尾輝久著『ルソー

ミール入門』有斐閣新書、1978年、191頁）と述べている。

- (19) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、32頁。
- (20) 同上、33頁。
- (21) 吉澤昇・為本六花治・堀尾輝久著『ルソー エミール入門』、191頁。
- (22) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、34頁。
- (23) 同上、35頁。
- (24) 同上、37頁。
- (25) 同上、53頁。
- (26) 同上、59頁。
- (27) 同上、70頁。
- (28) 同上、61頁。
- (29) 同上、60頁。
- (30) 太田祐周著『ルソーにおける人間の誕生』、369頁。
- (31) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、61頁。
- (32) 同上、62-63頁。
- (33) 同上、65頁。ルソーは「青年にとっていちばん悪い歴史家は判断をくだしている歴史家だ。事実を！ 事実を！ そして生徒自身に判断させるのだ (Les faits, et qu'il juge lui-même)。そうしてこそ、かれは人々を知るところを学ぶのだ。著者の判断がたえず生徒を導いていたのでは、生徒は他人の目で見ているにすぎない」(同上、64-65頁)と述べている。
- (34) 同上、61頁。
- (35) 同上、67-68頁。
- (36) 同上、68頁。
- (37) 同上、77頁。
- (38) 同上、76頁。
- (39) 同上、56-57頁。
- (40) 同上、172頁。
- (41) 同上、163-164頁。
- (42) 同上、169頁。
- (43) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(上)、81頁。
- (44) ルソー著、今野一雄訳『エミール』(中)、93頁。
- (45) 同上、90頁。
- (46) 同上、92頁。
- (47) 同上、88頁。
- (48) 同上、94頁。

